

後に蜚尤と語られる

北に、大荒城と云う土地がある。

天岳が生む湧水に恵まれ、陽が花を照らし、田畑は多くを育み、人々の腹を満たす。しかしこの土地は龍が巣くっていて、数年に一度大暴れしては、全てを水で押し流し命を食い荒らすのだとか。

この水龍を斬って捨てよと命ぜられ赴任してきた新たな同知——高級官職が、左乐であった。齡三十にも満たぬ若者で、顔にも身体にも皺ひとつ、傷ひとつ見当たらず。

利発な面差しと温厚な物言い、それから大層立派な直剣を一振り抱えてはいたが、あのような貴人に暴れ龍がどうこうできようものかと、官人も民も不安ばかりの瞳で左乐を見つめた。とある視察の時、左乐は産まれたばかりであろう小さな獣の仔を連れて帰った。川に流れ着いていた幼獣は水牛に似ているが、見かけない姿形をしている。身体じゅうが傷だらけで、たいへん弱っているのに、辺りに親は見当たらなかった。目付役の太合は反対したが、左乐は、「養生全てを助けるためにこの土地に来たのだから、幼獣一匹救ってやれないようでは不甲斐ないのです。」と言って、幼獣をよく世話してやった。夜ごと薬膏を塗っては、共に寝て過ごした。

幼獣の息はか細く、震える力すらも失い、今にも鼓動が止まってしまいそうである。左乐は身体を寄せると、体温の移る如く、生命がこの仔に宿りますようにと願い幼獣を抱きしめた。果たして翌朝、幼獣は左乐と同じ温もりをして、その命の続いていることを教えてくれた。

一ヶ月経つと幼獣の足はすっかり地面を踏むようになり、若き同知の後ろをついて回った。これでは政務にならないからと籠に入れられ、執務机の横に吊るされた。丸窓から射し込むのどかな陽光に包まれた揺り籠を気に入ってくれたらしく、幼子は小さな身体で大きな欠伸をしてすやすやと眠った。

たくさん草を食み、多くの糞尿を出した。ぼさぼさで疎らに生えていた短い毛はだんだんと黒艶の美しい毛並みになり、健やかな成長が目に見える。檀や茶のまだら模様が愛らしい様相であった。目付役はなんやかんやと談話をしながらも、幼獣の籠を編んでやり、息災を祈った。

二ヶ月が過ぎると、幼獣は皆のあちこちを走って遊ぶようになった。治世のために建立された皆は多くの人が滞在するため広大で、どれだけ探検しても更に新しい通路や部屋がいくつも見つかるのだ。

帰り道が分からなくなり尿意なんかを催すと、幼獣は致し方なくそこに粗相をする。一日の仕事が終わると左楽は、幼獣が頭を突っ込んでへんてこに変形した植木や、尿の痕跡を追って迎えに行った。余談だが、幼獣が初めて執務室の外に出た冒険の日、左楽は心配げに幼獣の後ろをついて回って、やはり政務にならないからと目付役にきつく叱られた。

そこら中に粗相をされては皆を作った土木天師が浮かばれないから、幼獣の下半身にはお極褌が装着されるようになったが、それもすぐ外されることとなった。幼獣は賢く、自分の排泄物が捨てられる場所を覚えると、毎度そこで用を足すのである。左楽は探索に出かけた幼獣の抜け落ちた毛や小さな足跡を丹念に探さねばならなかった。

幼獣と左乐が共に暮らし始めて、三ヶ月になる。もう身体も丈夫になったし、親や仲間のいるところに返してやったほうが良いだろうと、例の川辺に連れてきた。幼獣は水を怖がることなく、むしろ喜んで水遊びをし始める。水面に映る自分の姿を不思議そうに眺めては水をかけ揺れる写し身に笑うような鳴き声を上げた。

左乐は辺りを見回し、幼獣の仲間がいなか探したけれども、鷺がチイバアと鳴いているくらいで、水牛らしきものの姿はとんと見受けられぬ。あの仔は流されてきてしまったのだからもっと上流の方に住処があるのだろうか。部下を使いに出すか、視察の名目で自分が目を配りに行く必要があるな、と考えを巡らせる。

ふと、幼獣の様子を見ると、やはり楽しそうに水遊びをしているのだが、どうにもおかしい。水かきはあるのに浅かっただろうか？ 左乐は自らの目が変になったものと思っていくらか擦り、再び幼獣の姿を確認したが、どう見ても水の上に立っている。地面と同じように。まるで水が固形物であるかの如く。水の上を飛んで跳ねて、水しぶきを追いかけて遊んでいる。かと思えば、身の丈よりも深い川の中にざぶんと飛び込み、初めてとは思えぬ身軽さで泳ぎ回る。

奇怪なり。もしやあの仔は魍魎魍魎の類ではなからうか。そのような疑いが左乐の頭を過るがしかし——だから、何だというのだ。幼獣は左乐に懐き、左乐は幼獣に身を寄せて可愛がる。それが何であれ、想いは変わらぬ。

その日以降、不思議なことが起こるようになった。左乐が寢室に仕事を持ち帰ると、幼獣が寢台で不満げな顔をして待っているのだが、左乐はチラともそちらを見ない。そういう時、窓がひとりでに開いて夜風を呼び込むと、書類をふわりと浮かせて揚げてしまう。左乐はやれやれとため息を吐きつつも、寢台に横になり幼獣の身体を抱きしめる。

温もりを感じながら、「明朝には返してくださいね。」と声を掛けて。

四ヶ月もすると幼獣はすっかり大きく成長し、籠に収まりきらなくなった。だけでも気に入っているらしいから、はみ出した手足を小さく丸めぎゅうぎゅう詰めでなんとか収まると、床から同知を眺めた。籠は重たく、とても吊るしてはいられなくなったので。

左乐の仕事は忙しい。どの書類を提出したか資材は足りているかいつ来るのか工事の人員は集まったか、雨量はどうだ伐採構想はどうなっているか、そのようなことを代わる代わる部屋にやってくる部下たちとペラペラ話している。ずっと。

大荒城は天岳の恩恵を多分に受けるが、その分脅威にも曝される。田に引き込むにも荷を運ぶにも便利な川は、例年より少し雨が多いだけでたちまちのうちに牙を剥くのだ。暴れ龍というのはつまり、数年に一度大洪水を起こすこの巨きな川のこと、左乐は治水事業に任命されたのだった。

しかし四ヶ月の間、紙の束は高く積まれていくばかりでまったく減る様子が無いし、茶を飲む隙もなく、渴いた口でずうっと人と話していた。

五ヶ月をかけて、幼獣は人の言葉を話すようになった。元々「ごはん」「あそぶ」「おやすみ」などに反応していたから、よく覚えていたものだ。左乐は感心していたけれども、それどころの話ではなかった。「おはようございます」と、はっきり、草を食む口から音を出したのだ。

それから幼獣は一日に一句を覚えるようになり、次第に会話もできるようになった。磐に出

入りする官人や使用人は気味悪がったが、左乐は当然喜んだ。執務室で一人と一匹になるたびに、腹は空いていないか今日は何処に行つて過ごすのかあまり遠くに行かないように危険なことはしないでまた川を見に行こうか、そのようなことをきやらきやらと喋りかけるので、幼獣は鬱陶しい声色で応える。

「ズオさん、喋っている暇があるなら向こうの書類に判を捺したほうがいいんじゃないですか。」

会話をするようになってからわかったことだが、この仔は少し生意気であった。

六ヶ月の時間が流れた。左乐と幼獣は暇があれば川辺を散歩して、親や仲間が迎えに来ないものかと思っていたが、半年も過ぎると無名であることに不便を感じる。左乐は幼獣に「宝宝」

「赤ちゃん、と声を掛けていたけれども、人の言葉を話すようになってから、それに反発するようにになった。曰く、「もう赤ん坊ではないのだから、恥ずかしい呼び方はやめてください。」とのこと。」

左乐としては幼獣を親や仲間の元へ帰してやるつもりだから、自分が名を付けるのは、この仔を飼うようで良くないことだと思っている。どう呼んだらよいものか。

上流へと使いに出した部下が持ち帰ったのは、暴れ龍によって田畑が崩れ、その後飢饉で死したであろう村落がかつてそこに在ったらしい、という報告だけで、幼獣の仲間はいつまで経っても見つからない。

左乐はそういった廃村を無くすためにやってきた。堤防を作り水門で戒め、水龍の首に縄をかけてやる。そうして初めて、この土地に住むものは龍を恐れなくて済むようになる。

「ズオさんは、僕を親元に帰してやるとはかり言いますけど、それは何処に居るのですか。」

幼獣がぼつりと言った。左乐に話しかける口ぶりだったが、その瞳は山の向こうを見つめている。左乐は瞳を見なくとも、仔が寂しさを感じていることを充分に理解していた。

「もう、居ないのではありませんか。」

「まだ見つからないだけです。居ますよ。あなたの家族は私がきつと、見つけますから。」

「見えないから無いのだって、そんなの気休めです、子供騙しです。僕は騙されません。」

「有るものだって見えます。ほら、空気だって。」

川の上に立つ不思議な仔の元へ、ざんぶと腰まで水に浸け、左乐は歩み寄っていく。息を吸って膨らむ肺を表現するように、腕を広げた。抱きとめる。拾い上げた時は両手のひらに収まった幼獣は、両腕を回しても足らないほどに大きく成長したが、風の如く軽かった。まるで此処に居ないみたいに。

「見えないけれども、其処此処に在りますよ。」

「……………」

「私は見つけるのが上手でしょう。あなたが何処に出かけたって、毎日追いかけているではありませんか。」

「……………」あれは、僕が痕を残してあげているだけです。ズオさんがいつまで経っても探しきれなくて、宝宝、宝宝、つてうるさいから……………」

「では、泣き止むように、あやしてくださいますか？」

「……………」、しょうがないなあ。」

幼獣と左乐は連れ立って川から上がった。岩へ帰ると、左乐だけがしとどに濡れており、冬

の冷たい風に曝され、見事に風邪を引いた。寒気が止まらぬ身体は、温かな存在が体温を分けてくれる。

さて、名をどうしようか。

七ヶ月を重ねた幼獣は蹄を爪に、毛皮を皮ふに変え、二本足で立って見せた。人のように。左楽はもはや驚かなかった。

ふかふかの耳とすべらかな尻尾、それから勇ましい白角だけは、何故だかそのまま身体から生えている。

獣から少年に姿を変えても、子の印象は変わらなかった。まろい頬も、白葡萄酒のように煙めく瞳も、風になびく黒毛も、不貞腐れているのが常の愛らしい態度も、穏やかな寝顔も、丸く寝そべる姿も、やわらかな温もりも、何もかもが。

この頃、街には占い師の評判が上がっていた。商人と共に、近辺を周遊し旅をしているのだと云う。そこで左楽は、この占い師に名付けを任せることにした。

占い師は金の髪を靡かせる女性であった。連れて行った子の手を見て、占い師は「禾生」と名を呼んだ。もみじのような手のひらの溝をすうっとなぞり、どこから取り出したのか一本の稲苗を握らせると、「この仔はきつと、この地の人々を救うことになるでしょう。」と言った。

八ヶ月が経つ頃、禾生はとくに例の籠には収まりきらなくなっていた。執務室には一つ余分な椅子が置かれるようになり、禾生はそこで読書をしながら同知の仕事を覚える。そうするよう目付役から頼まれたのだ。

左公子は本来机に座っているのではなく、あちこちを見て回って身体を動かす方が性に合っているお人なのであろう、仕事を放り出すことはないけれども、やんちゃを仕出かさないうか、よく見ていてほしい、と。

執務室を訪れた官人たちが口々に、牛の仔はどうしたのです、あの少年は誰ですか、と訊ねると、左乐は「宝宝は親元へ帰しました、あの少年は預かり子です。」と答えた。嘘ではないおそらく。禾生が文句を言わなかったし。

そして禾生は、占い師から貰った稲苗の扱いに困っている。砦内にある畑に持っていくと、農業天師から「植えるには早すぎるよ。せめて春までは待たないと。それにしても、どうしてこの苗はこんなに瑞々しいのだろうね。」と首を傾げられた。仕方なく、部屋の水差しに入れて春を待っている。

冒険探索も相変わらず続いて、その足は砦の外まで赴くようになった。雪の下で新しく芽吹いたものを興味深く観察し、書物の内容と照らし合わせる。もう自分で砦の、左乐の部屋まで帰ることができるけれども、左乐が迎えに来るまで、ずっとそうしている。石みたいに、木の根みたい。

九ヶ月の後、春が訪れた。雪の雫は解け、あちこちで黄緑色が萌す。

禾生の背も、筍のようにぐっと伸びた。上背が出ると大人と似た扱いをされることが増え、やれ梁を補修してくれ、やれ水車の様子を見てくださいだのと雑事を頼まれる。禾生はしばしば書物を読んで、物事の仕組みやつくりをよく理解していた。それに、優しい子だから、お願い事をされると決して嫌とは言わなかった。わからないことは人に訊ねたり、書物で調べたりした。

書物では知ることが出来ない部分もあるから、探索も頻繁に行われた。鳥と歌い、草と語らいながら大地を往く。

何故か冬を越えた稲苗は、皆に一番近い農家の水田の隅を借りて育てられることとなった。青空を照らし返す泥田に、ピンと一筋、背を伸ばして立っている。どのような穂を付けるだろうか、どのような米が出来上がるだろうか。育ててみないことには、わからない。

十ヶ月の歳月を経た。思い出を大事に包み込むように、餡子餅を笹の葉で包みこんでいる。

「はい、小禾^{コホ} あくん……」

「やめてください！ もう子供じゃないんですから。」

おやつを運んでやったのに拒否されて、左乐は口を尖らせた。拒まれる理由にも不満がある。禾生は子供であるに違いなかった。

「何を仰います。まだまだ小さく……小……」

両手で抱えていた頃。離からはみ出していた頃。両腕でも抱けなくなった頃。二本足で立った頃。その、どの記憶とも違う身体だ。脚も腕もたくましく育ち、背丈は左乐の頭に届きそうになっている。

そういえば最近、寝台を狭く感じたような……

「……大きくなりましたね。」

「ふんっ。」

鼻を鳴らしてそっぽを向くと、禾生は大きく口を開けて粽^{ちまき}にかぶりついた。

大荒城の春は短い。——季節はまもなく、初夏を迎える。

十一ヶ月目、禾生は左乐と並んで、背丈に違いが出ないほど大きく成長した。確かに、もう子供とは言えない。

子供というのは、あつという間に大きくなってしまふのだなあ。左乐には妻子が居ないので禾生が初めて育てた子になる。成人してからも親がやたらと自分の小さい頃の話を持ち出すことに恥じ入っていたが、なるほどあれは短く惨い時期を懐かしんでいただけなのだと言点した。

もし左乐の思考に誰か他人が介入すれば「いやいや、おかしいだろう！」と指摘を送ったかもしれない。いくらなんでも早すぎる、尋常ではない、お前はそれにもっと危機感を持ったほうがいい。けれど左乐の頭は左乐のものでしかないから、なんでも自分勝手に決めてしまふのだった。

左乐が禾生と共に寝ている寝台は、貴族のために立派な設えとはいえ一人用のもの。成人二人が横になると、さすがに手狭だった。何故今まで思い至らなかったのか不思議だが、禾生には禾生の寝台を用意してやることにした。

街で評判の商人——占い師と旅をしている男性——は、左乐が「急に大きくなる人用の、特別大きな寝台」を注文するのを聞くと、柔和な顔に薄らとした笑みを浮かべて尋ねた。

「あなたはそれを人だと思うのですか？」

左乐はすぐに頷いた。言葉を理解し意思を交わし、二本足で立って歩くのだから、自分と同じ人である、と。

「しかし、始めはそうではなかったのでしょうか？ あなたは獣に寝台を用意するのですか。かの獣は四つの足で大地を踏んだのでしょうか？」

「今はそうではありません。」

「今が永遠に続くものと、誰が約束できるやら。」

「私が約束します。」

「ほう？」

「たとえホーシェンが獣に戻るであろうと、あの子と過ごした日々が変わりはありませんこれまでの月日と、交わした絆に誓って、私は永遠にホーシェンの傍に在りましょう。」

「……では、その誓いを対価とします。寝台は手配しますよ。お楽しみに。」

特別な寝台はすぐに告に届いた。それは一等大きく、使用人たちは禾生のために用意された部屋へ運び込むのにひどく苦労した。けれども、禾生がその部屋に立ち寄るのは、本棚に書籍を出し入れする時くらいで、特別な寝台も使われることはなかった。禾生は未だ、左楽の寝台に我が物顔で寝そべっている。何故かと尋ねると、こう答えた。

「部屋も寝台も、ズオさんが勝手に手配しただけです。僕は使うなんて言っていないですよ。」

ぶいど顔を背けて言う青年に左楽は、ははあこれが反抗期というやつか、と判断して、仕方なく共寝した。反抗期も長く続くものではないだろう。部屋も寝台も、いずれ必要になる時が来る。

子の心を親は知らず、月日は年月となる。

夏のある雨の夜、左乐は寢室の扉を叩くけたたましい音で目を覚ました。音を発していた目付役は落ち着いた様子だが、告げる内容は大層剣呑なものであった。

「一刻前、突然推定水量を超えました。突発的な鉄砲水が何かに堤防が耐えられず、崩壊寸前となっております。近辺一帯に流れ出てくると考えられます。」

「ッ……住民の避難を急がせます！」

「避難は既に済んでいるようです。」

「え？」

「同じく一刻ほど前に、黄金に光る鷲が村々の上を飛び、高く鳴いて危機を告げ回ったそうです。漏水が道を防ぐ前に、移動することができたとのこと。」

神話かおとぎ話のような出来事に、左乐の逸る気持ちが収まっていく。目付役は部屋に入ってきた時と同じ、神妙な顔つきのままである。

「……………こういった時に冗談を言うお人柄でないことは、重々承知しています。他には？」

「民の避難は完了しており、今現在は、河川工事のため宿泊していた天師たちが数名、通行不可の川岸に取り残されているようです。」

「土嚢の配備を。堤防を保護します。運び手の安全も確保しながら進めてください。」

左乐は素早く判断をくだす。優先すべきものなど、はるか昔からわかっている。

「承知。……取り残された天師たちを龍が襲う前に、保護が終わると良いのですが。」

言い終わると、目付役は足早に去っていく。緊急事態に及んで、伝令があちこちを走り回っているはずだ。

——自分が走った方が速い。

幼い頃から訓練に取り組み、軽功を身に着けた左乐は悔しさに歯を食いしばった。適材適所されど、立場というものもある。同知は伝令の報告を聞き、即時の判断を伝えなければならぬ。

左乐はごく簡単に身だしなみを整えると、執務室に向かおうとして足を踏み出し、そこではたと気づく。

寝台は空っぽだ。共寝していたはずの禾生は、どこに行ったのだろうか。

夜明けが近いのに、空は暗黒を湛え、大粒の涙を流している。雨雲の気配は読まれていたが堤防を壊すほどのものではないと予測されていた。治水工事によって暴れ龍は抑えられつつあったが、彼の者はまだまだこちらの見通しを超過する力を携えているのだ。

これから長雨になる。

禾生は皆の出入り口より距離をおいて、空を眺めて立っていた。雨は彼の身体を打つが、不思議と濡れた跡は見受けられない。

左乐は禾生に呼びかけた。

「シャオホー！ 執務室に来て！ 報告を纏めます、手伝ってください！」

ほとんど嵐の風がぶおんと舞い、左乐ですら立っていられなくなる。

揺らぐ。

暗雲の下、視界も濡れ、滲み、景色に溶け込むような黒髪。禾生は遠くを見ている。

「行きます。」

禾生が端的に言った。

「……どこへ。」

左乐は訊ねる。わかつている。

禾生が左乐に目を向けたが、視線は繋がらなかった。視界は昏い。

「みんなを……君を助ける時が来たんです。恩を返す時が。」

禾生はそう言った。そして左乐から顔を背け、歩き始める。岩の外へ。川の方へ。

「行かせませんよ!!」いくらあなたが頑健であろうと、傷を負うとわかっていて単独行動をさせるわけはないでしょう!!」

左乐は駆け出し、禾生の進行を遮った。足は止まるが、引き返す気は無いようだった。

「多くの民の命が大切なのに。」

「命すべてが同等だと、何故わからない!」

左乐の視界は滯んでいる。霞んでいる。雨の中の暗闇に灯りは無い。子がどんな顔をしているか、わからない。

「——親の言うことを聞きなさい、ホーシェン!!」

このようなことは言ったことがない。養育者の權威を笠に着て、要求を無理やり飲ませるようなことは。言いたくもなかった。しかし左乐は、立ちほだからなければならなかった。

禾生の顔を窺い見ようとして、左乐はようやく気がつく。彼の貌は影になっている。暗い下を向いているから。

見下ろされている。厳つく、立派な大人の体躯で。

彼は歩行すら危うい幼獣の姿から、たった一年でここまで変貌した。人間の成長とは異なる。重ねた年月よりも、その中にある力は不きい。

地に響くような低い声が言う。

「子より小さく、年若い親が居ますか？」

そして過ぎ去った。嵐と同様に、強い力で、情を薙ぎながら。

同知である左楽は司令官として、砦に居なくてはならない。最も危険な川岸にいく人を——あるいは獣を、追いかけることはできない……

「……シャオホー!!」

悲痛な叫びが、雨降る中に響いた。

後に救われた天師は、信じられないが本当だ、この目で見たのだと言って、前のめりに語った。

突然現れた龐大な水牛が、川に飛び込んで溢れた水を堰き止めた。次々に打ち出される鉄砲水から自分たちを庇い、その身体には折れた木や岩石が叩きつけられたが、傷だらけになりながら自分たちが逃げる時間と道を作り上げてくれた——そして、暴れ龍と、相討ちになって消えたのだ、と。

朝になっても、一日経っても。月が変わって水が引き、大荒城の安全も確保され、住民たちが自分の家に帰ることが出来ても、禾生は戻ってこなかった。

左楽の寝台はずっと冷たい。

「面憂れしているわね。ご飯はちゃんと食べているの？ 温かいものは飲んだ？ 胃は大事にしないとだめよ。」

憔悴しながらも堤防の再建に取り組んでいる左楽に、陽だまりのような優しい声が掛かる。古い師の女性だ。傍らに商人の男性も控えている。さらに後ろには目付役の姿があった。彼が喚んだらしい。

古い師は商人に視線を送った。

「ねえ、強壮薬は無いかしら？」

「有るには有りますが……公子殿は求めないのでは？ 彼が欲するは、彼方のものでしょう。」

左楽は据わった瞳で商人を見た。用意できるのなら此処に並べてみる。何処のものが有ったとしても、あの子に勝るものは無い。

無い。

見つけることができない。

「獣の首に縄を掛けるならば、あなたも相應の力を持たなければ。」

商人は左楽の鬱屈とした目を歯牙にもかけない。それがまた左楽の神経を逆撫でした。胃が煮えるような熱り立った様子で声荒げる。

「何をしろと言うのです。対価を差し出したとて、あなたに出来ることは無いでしょう。売れるものなど無い!!」

「出来ますとも。命を取り戻すことは出来なくとも、道を示すくらいなら。」

商人は静かに答えた。糸車は力任せに回してはならない。定常的な力と平らかな速度で、糸を

作り上げるのだ。

「堤防の上流に、特段流れが烈しい水衝部がありますね。あれが原因です。その崖岸に、彼の獣ほど巨大な岩が鎮座しています。その岩を斬りなさい。」

どれだけの名刀と云えども、岩の硬さに敵うだろうか？ 商人は無理を言っている。しかし無理を申し付けている面ではない。占い師は、ずっと穏やかに微笑んでいる。

商人は、くい、と首を傾げて、挑発するように言った。

「汝が力、能わんや？」

左乐は答えない。代わりに、父より賜った一振りの直剣を握り、同知の席を立つ。今此処に誰かが座っている必要は無い。ようやく空けられる。

目付役が道を譲り、その背を目で追った。

執務室に残った占い師が、懷から小さな種を取り出し、空中に放る。それは信じられないことに、霞となって消え失せた。

「姉さん。」

「いいでしょう、これくらい。大差などつかないわ。あの子たちはいつだって、大丈夫なのよ——、一度そう成ったのだから。」

わからない。これからどうなるのか、どうすればいいのか。商人の言っていた意味も、占い師が姉のような視線を向けるわけも、なにもかも。

しかし左乐は歩みを止めぬ。そうしろと言われたからではない、確かな意志で道を往く。

毎日探し歩いている。だけでも水牛に似たあの子は、誰でもないあの子は見つからない。

見えないからといって無くなったわけではない、左乐はかつてそう言ったが、自らを苛む悪い想像には逆らえなかった。胃が食物を拒否する。手が震える。毎日、冷たい寝台で動悸を抱えながら朝を迎える。

けれども。

悪い想像と同じくらい、希望を携えている。

きっと生きている。きっとまた会える。そう信じている。きっと傍に在る。たとえば姿が、見えなくとも。

切り立った崖岸を見上げる。天辺までは大の大人が三十人ばかり必要だろうか。左乐は跳べるところまで跳んでたどり着くと、裸の手で崖の飛び出た岩を掴み、足を掛けた。

夏日の陽射しが顔に、背に、容赦なく降り注ぐ。滝のような汗が体力を奪って滴り落ちていく。それとは逆に、左乐の身体は上昇した。天に向かって。人ならざるものに挑んで。

体力が尽きかけ、足を滑らせると、都合よく木の根がせり出しているところに引っかかり、難を逃れる。それに助けられながらも、左乐は崖岸の上に立った。

確かに巨きな岩がある。而れども大したことはない。あの夜の禾生は、もっと丕きく見えた。左乐は躊躇せず剣を振りかぶり、太陽が刃を煌めかせ、鋼が巨石を打ち、硬質な音が河川に響き渡って、そして。

そして……真つ二つに割れた岩の向こうに、人の姿が在る。

その人は気まずそうに、照れくさそうに、わずかな笑みを添えて、其処に立っている。確かに存在している。本当に？

左乐はひた走り、広い胸に飛び込んだ。やわらかな皮ふに触れる。日がな一日探索に出ると

こんがりと焼けて帰ってきた。ここところは農具を握って手のひらも厚くなっている。無常の姿。けれど変わらぬ、温かさ。

「——シャオホー！ 怪我は？ 酷く傷ついたと聞きました、龍と相打ちになったと……」

「間違いないやありません、けどもう癒えました……心配しましたか？」

「当たり前です!!」

両腕を回しても抱きしめきれない太い胴体には、大きな怪我は見当たらない。強がりと言う禾生のことから、嘘ではないかと睨みつけたが、禾生は勝ち気な笑みを返すばかりだ。

低い声が何事もなかったかのように、のんびりと静かに語る。

「川の境界を渡って……家族に、会ってきました。」

「家族に……！ そうですか、見つかったのですね！ 良かった……、……。」

左楽は嬉しい報告に顔を綻ばせたが、笑顔のまま固まった。血族が見つかったということは真の別れがすぐ其処に迫っているということ。再会したばかりだとしても。

落胆を飲み込むと、左楽は一息に述べ立てた。

「生きていることを報せてくれて、ありがとうございます。どうかお元気で。ご家族にもよろしくお伝えください。」

「……………」

禾生は応えない。どこか不満気ではあるものの、ニヤケ顔が隠せていない様子で、口を歪ませながら、少しずつ言葉を漏らした。

「……泣いている、」

「え？」

ゆっくりと言い、禾生の手は左乐の頭を撫でた。

「泣いている赤子をあやさないといけないから、向こうに……此処に戻ると、伝えてきました。」

禾生は滅多に見せない、晴れやかな笑顔で告げる。

獣の神は瘴気より生じ、陰界に棲むという。人の棲む世を、陽界と呼ぶ。

住処が違っては生きづらかろう。親が、仲間が居なくては寂しかろう。

けれども、傍に居てくれるのだと言う。

「……ッ！ シャオホー、シャオホー！」

「……………本当に泣くこと、ないでしょう。」

左乐の體が燃えるように熱く、汗で冷えた頬を温めた。

寝台ももう、永遠に温かいらしい。

その後、直剣に斬られた巨石は強固な堤防を築く礎となった。彼らは、暴れ龍を仕留めた神として語られる。凶悪な角を持つ水牛の頭をして、肉体は人間である。手には鉄の剣を持ち、嵯道を飛ぶように移動して、蒼生全てを守り、救ったのだと云う。

そして、農耕の祖『神農』と共に、大荒城で永く、守護神『蚩尤』として崇められたのだ。た。